



[果樹部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

6. ブドウ「マスカットジパング」の裂果及び裂皮の発生が少ない無核化・肥大処理

[要約]

ガラス室栽培の「マスカットジパング」の無核化・肥大処理を、「シャインマスカット」と同様、満開期にフルメット5ppm加用ジベレリン25ppm、満開10～15日後にジベレリン25ppm単用で行うと、裂果及び裂皮の発生が少ない。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 果樹研究室

[連絡先] 電話 086-955-0276

[分類] 情報

[背景・ねらい]

「マスカットジパング」は、皮ごと食べることが可能な黄緑色系品種である。しかし、本品種の栽培方法は確立されておらず、裂果及び裂皮の発生が問題となっている（図1）。そこで、裂果及び裂皮の発生が少ない満開期の無核化・肥大処理濃度を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 満開期の無核化・肥大処理をフルメット5ppm加用ジベレリン25ppmで処理すると、裂果及び裂皮の発生が少ない（表1）。
2. フルメット濃度を2ppmに下げると、裂果の発生が増加する傾向がある（表1）。
3. さらに、ジベレリン濃度を12.5ppmに下げると裂皮の発生が多くなる（表1）。
4. 無核化・肥大処理がフルメット2ppm加用ジベレリン12.5ppmの処理では、ジベレリン25ppmを用いる場合より果粒重が小さい（表1）。
5. 糖度は、無核化・肥大処理による差はない（表1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 2020年には側窓開放による雨除け栽培、2021年には開花期の補助加温栽培とし、両年とも所内のガラス室における無袋での試験結果である。
2. 玉直しのしやすさは、区間に大差はなかった（達観）。
3. 「マスカットジパング」の裂果の発生は、主に果梗部周辺（通称：三日月裂果）が多い。
4. 裂皮は、主に果頂部周辺での発生が多い。
5. 2021年には8月上中旬の日照不足の影響により、全体的に糖度が低かった。



[具体的データ]



裂果（通称：三日月裂果）



裂皮

図1 「マスカットジパング」の果皮表面に発生した裂果及び裂皮の状態

表1 「マスカットジパング」における無核化・肥大処理濃度の違いが障害果（裂果及び裂皮）の発生及び果実品質に及ぼす影響^z

年次	無核化・肥大処理 (満開期)		肥大処理 (満開10～15日後)	裂果 ^y (粒/房)	裂皮 ^x (粒/房)	果房重 (g)	果粒重 (g)	糖度 (° Brix)
2020	G A25ppm	+ F 5 ppm	G A25ppm	0.4	0.2	528	17.6	17.6
	G A25ppm	+ F 2 ppm	G A25ppm	1.3	0.1	575	17.7	17.4
	G A12.5ppm	+ F 2 ppm	G A25ppm	1.1	0.7	494	16.2	17.6
2021	G A25ppm	+ F 5 ppm	G A25ppm	0.6	0.9	932	19.6	16.0
	G A25ppm	+ F 2 ppm	G A25ppm	4.3	1.4	959	19.0	16.3
	G A12.5ppm	+ F 2 ppm	G A25ppm	4.9	2.8	899	18.0	16.9
年次(A)			2020	0.9	0.3	532	17.2	17.5
			2021	3.3 ^{**w}	1.7 ^{**}	930 ^{**}	18.8 ^{**}	16.4 ^{**}
ホルモン処理(B)			G A25ppm + F 5 ppm	0.5	0.4	644	18.2	17.2
			G A25ppm + F 2 ppm	2.1 [*]	0.5 ^{**}	684 ^{**}	18.1 ^{**}	17.1 ^{ns}
			G A12.5ppm + F 2 ppm	2.1	1.3	610	16.7	17.4
交互作用(A×B)				ns	ns	ns	ns	**

^zG Aはジベレリン、Fはフルメット

^y果梗部周辺の裂果（通称：三日月裂果）

^x果頂部周辺の裂皮

^w二元配置分散分析法により、**は1%水準、*は5%水準で有意差あり、nsは5%水準で有意差なし

[その他]

研究課題名：ブドウ新品種の安定生産技術の確立

予算区分・研究期間：県単・令2～6年度

研究担当者：渡辺真帆、中島譲、安井淑彦、中津有紀子

関連情報等：1) 試験研究主要成果、[平20 \(35-36\)](#)